

## 論文の要約

報告番号	甲 第2号 ㊦	氏名	山本 貴恵
学位論文題目	「近代における「八犬伝」受容史論考—考証と資料—」		
<p><b>【目的・問題提起】</b></p> <p>本博士論文は、主に近代における「八犬伝」受容史に関する調査、考察を行い、論じたものである。取り扱った範囲としては、幕末から昭和三十年代までである。研究目的として、以下の三つの疑問点を掲げた。</p> <p>①「八犬伝」は近代以降、本当に文学史通りに人気がなかったのだろうか。</p> <p>②そもそも近代以降、どのような受容史の流れを辿ってきたのだろうか。</p> <p>③近代に入ってから、人々に多く享受されてきた「八犬伝」とは一体どのような作品であったのだろうか。</p> <p>その背景として、文学史上での「八犬伝」についてを論じる必要がある。文学史上では勸善懲惡思想である『南総里見八犬伝』は、坪内逍遙によって駆逐されたはずであった。しかし、駆逐されたはずの「八犬伝」は現在まで、多くの人々に享受されているといえる。その背景として、文学史における近世と近代の区分の仕方に問題があるだろう。</p> <p>研究対象として、先行研究において空白部分といえる、“従来、一般的に俗文学だと考えられてきたもの、いわゆる大衆文学”を取り扱うこととする。</p> <p><b>【考察】</b></p> <p>本稿は、第一部の考証篇と第二部の資料篇に分かれている。第一部考証篇は、大川屋書店の講談本やカバヤ文庫の児童向け本といった、主に大衆的な読み物と考えられる作品から、近代以降の「八犬伝」の様相はどのようなものであったかを探ることであり、かつては一世を風靡していた作品に再び注目したものである。そのため、先行研究は乏しく、入手した資料を元に一つずつ考証を積み重ねている。</p> <p><b>第一章</b></p> <p>架蔵本である大川屋書店版『里見八犬傳』二点についての版本の調査を行なった。この大川屋書店版『里見八犬傳』は、「八犬伝」受容史において明治期の主要なダイジェスト本であると位置づけられる。考察の結果、本文内容については、作者は原本を読んでいた、もしくは原本に準じたテキストを実際に読んでいたと考えられる。そして、この二点の大川屋本は、現段階における、孤本（同本文を有している典籍が他に見当たらないという意味で、本文を指して使用している）と見做されるであろうことを述べた。</p> <p><b>第二章</b></p> <p>『大川屋出版圖書目録』について紹介し、「八犬伝」受容の側面からの考察を行った。これまで大川屋書店の発行物の全貌を知ることが可能な資料の所蔵は明らかとさ</p>			

れていなかったが、この度、見出した。本目録は当時の大川屋書店の出版物や実情を知ることができる現在における唯一の貴重な資料である。考察の結果、明治期においても文学史上の通説とは異なり、「八犬伝」は依然として人気であったこと、また、「歴史文學」として受容されていた様子が窺えた。

### 第三章

第一章で紹介した大川屋書店版『里見八犬傳』二点と同じ本文を有する資料を新たに入手し、三点での比較考察を行った。九阜館本は、後に大川屋書店に著作権譲渡されたようである。初版から、合計で二、三回の著作権譲渡が行われたと考えられるが、形は変わっても時流に乗り続け、同本文が広く読み継がれてきたことが明らかとなった。

### 第四章

キャラメルのおまけとして人気を博した、カバヤ文庫の一冊である『里見八犬伝』について注目し、考察を行った。カバヤ文庫は昭和二十年代における隠れたベストセラーである。本稿では、カバヤ文庫の中の一冊である『里見八犬伝』の再話と挿絵の典拠を考察した。その結果、原作からカバヤ文庫へと至る一連の受容の流れを明らかにすることができた。

また、カバヤ文庫の巻末にある読書投稿欄を調査し、昭和三十年前後の『里見八犬伝』の享受の一端について知ることが可能となった。

### 第二部資料篇

明治末から昭和初期までの近代児童向け本を調査した結果をまとめ、紹介した。

「八犬伝」受容史における児童向け本は、近代の児童向け草創期についての一次資料がよく分かっていない。そのため、研究史を補完すべく、できる限り調査した結果を目録と書誌にした。

### 終章第一節

第二部資料篇において収集した資料を元に、近代における児童向け「八犬伝」の傾向を分析、考察した。その結果、叢書として刊行されたものが多いという特徴や、単行本においても多数版を重ねていたことから、近代以降の児童向け本においても、「八犬伝」は人気があったことが明らかとなった。

### 【まとめ】

第二節の結論では、本稿全体の研究を通して、「八犬伝」は近代以降も依然として、文学史上の通説とは別に、「むしろ人気であったこと」が明らかになったことを述べた。背景となる文学史の通説は誤りである言わざるを得ない結果となったのである。

文学史とは、当時の一部のインテリの認識によって書かれたものではなかったか。その一知識人によって「勸善懲悪主義」の一言で片づけられ、駆逐されたことになっているのは、悲しいことである。また、近代における知識階級層とその周辺に置かれる大衆文学という構図の捉え方にも問題があると言わざるを得ない。

冒頭に掲げた疑問は本稿を通して解明できたことと思うが、まだまだ積み残された課題は多い。文学史によって作られた近代における「八犬伝」のネガティブイメージが払拭され、「八犬伝」受容史研究がさらに盛んになっていくことに期待したいと思う。